
北風と魔王

多々良ゆゑむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

北風と魔王

【Nコード】

N6181S

【作者名】

多々良ゆゑむ

【あらすじ】

4月なのに春が来ない北の国。

大魔王に代わってそこを統治する北の「地方魔王」ラッディは、補佐官の少女マオと共に、国民の安全確認と春が来ない原因を調査する為に氷点下の大地へ繰り出す。

いまはほのぼのっぽいけど、これから残酷な描写がある……かも

北風と魔王 1

「魔王様、足を伸ばさないでください」

横になっっている脚に踵が落とされる。

コタツの中での攻撃は、大した威力があるわけではないが、その重みでラッディは目を覚ました。

上半身を起こした長身痩躯の魔王は、コタツを挟んで少女——マオと向かい合う。

編み物の邪魔するのは気が引けたが、それでもラッディは口を開く。

「寒いんだから仕方ないだろ」

「じゃあ、もつと大きなコタツを買ってください」

「春が来たら考えてやる」

「春になってからでは遅すぎます。可能ならば、今すぐ買いに行つて欲しいです」

マオはラッディより二年早く魔王軍に入った先輩だが、歳はラッディより七つも若い。

わずかにウェーブのかかった淡い紫色の髪を背中まで伸ばしていて、三白眼と、魔族の証たる赤い瞳には冷酷な印象を感じるが、小柄な体型がそれを魅力に転換している。

ラッディは入隊して以来、現在進行形で何かと彼女に世話になっているのだ。人間である自分が、同期の魔族たちを押しつけて二十代前半という若さで魔王の座に就けたのも、ひとえに彼女のお蔭だということを一時も忘れたことが無い。

始めは上司と部下の関係だったので敬語で話していたが、『私には』同年代のように』接してくださって結構ですよ』と言うので、砕けた口調で話すようになった。

それは補佐官と魔王という、逆転した関係になったとしても変わ

らない。

「無理だっつーの。お前は、こんな天候なのに外に出ると？」

「はい」

窓の外を見やる。外は十メートル先も見えそうにない猛吹雪だ。

ラッディが統治する北の国は、中央国の大魔王の統制下にある四つの地方国の一つで、冬に激しいブリザードが発生して外出が困難になる。その為、ここの住民達は秋に食料や物資を溜めこみ、厳しい冬を乗り切るのだ。ラッディは大魔王の命により、半年前から北の国を統治する『地方魔王』として、マオと共に滞在している。

「今、何月だっけ？」

ラッディは素朴な疑問で話題を転換した。

長い間家に籠っていると、時間の感覚がおかしくなる。それはマオも同じだったようで、編み物をする手を止めて、少し考え込んでいる。

返答が来るまでコタツの上にあるミカンを剥いて僅かながら時間をつぶす。ラッディは白いスジを綺麗にとって食べるタイプだ。

僅かな思案の末、マオが沈黙を破った。

「四月のはず」

おかしいですね、と付け加えるように呟く。

「何が？」

ラッディはスジ一つない綺麗なミカンをマオの口元に持って行って尋ねる。

「例年通りなら、ブリザードは三月中旬には収まるはずなんです。

……はむっ」

ぱくり、と食いつき咀嚼しながら、マオは編み物を再開する。

マオは何度か経験しているが、ラッディは北の国を訪れるのは初めてだ。それでもこの国の面積が大陸の国々の中で二番目に大きい事と、一番人口が少ない事。あと、とても寒い事くらいは知ってい

た。

しかし、この国の環境がここまで酷いものだとは知らなかった。まず、厳しい寒さで痩せこけた土壌は農業や牧畜に不適切。だから食べ物のほとんどは、輸入で賄っている。さらに過疎国であるが故に十分な資金を得られず、その環境を改善することもままならない。改善されない環境に嫌気がさして人が離れ、さらに資金が削減される。

どうしようもない負の連鎖である。

「国民は大丈夫なのでしょうが」

そう述べた後、ラッディに向けて口が大きく開かれる。無言の要求が受け入れられてその中にミカンが放り込まれると、マオの口元が微かに綻んだ。

それに釣られてラッディからも笑みが零れる。

しかし、それどころではない、と二人はすぐに表情を引き締めた。

「この人は遅いから大丈夫だと思うが……どうだろう」

ここまで冬が続くことは、長年ここに住んでいる住民にも予想でしなかったことだ。となると、食料が足りているのかが気にかかる。

魔族の場合、その気になれば外に出て隣国で食料の調達が可能だが、人間たちはそうはいかない。念のため、各家庭を訪問し備蓄の状況を調査すべきだろう。

「ちよつと確かめてくるわ」

「私も行きますよ」

ラッディはコタツから脱出し、壁に掛けてあった外套と手袋を着込む。

ラッディが玄関に立った頃、マオはやっとコタツを抜け出し、ラッディと同様の、しかし一回りも二回りも小さな外套と手袋を身に着けて、玄関に向かった。

そして――

「やっと完成しました」

失敗作ですが、と付け加える少女の右手には手編みのマフラーが握られていた。

「俺のだったのか、それ」

こくり、と頷くマオからマフラーを受け取ると、ラッディはそれを首に巻いた。端の編み目がガタガタになってしまっているが、気にする程のものではない。

寒さに弱い自分の為に数ヶ月かけてマフラーを編んでくれたのが、ラッディはたまらなく嬉しかった。

「うん、あったかい。ありがとな」

ラッディはこの喜びを伝える手段として、マオの頭を撫でてやる。マオは眉をひそめて不服の表情でそれを受け入れた。

この娘は子ども扱いされることを嫌う。

だけど、妙に撫でたくなる。過酷な環境での勤務のせいで荒れ気味の髪には艶が無いし、ラッディと同じ安物のシャンプーを使っているから、特別良い匂いがする訳でもない。

それでも撫でたくなるのは、マオの頭が綺麗な形をしているからなのだろう、とラッディは自分なりに目の前の少女の魅力を分析した後、頭から手を放した。

「お前はそこの大人よりよくやってるよ。……行くか」

ラッディが玄関扉を開くと、もう一つの玄関が姿を現した。

*

北の国の住宅は、玄関が二重構造になっている。

これは雪や外の空気の侵入を抑える為のもので、凍てついた結露からはこの空間が氷点下である事と、外の世界の過酷さが伺える。ラッディを先頭にその空間を抜けると――視界がホワイトアウトした。

「なんだこれは……」

太陽光が遮られ、吹雪によって雪が舞いあがっているため、天と地の差別が付かないのだ。いざというとき吹雪の中でも行先を見失わずに行動できるように、先代の地方魔王が十五メートル間隔で目印を建てていたのだが、この吹雪の中ではそれを見つけることさえ叶わない。

草木も育たぬ白い砂漠を前にした二人は、下手に動くことができなかった。

「魔王様、少し宜しいでしょうか」

「なんだ!」

吹き荒れる強風の中でも少女の声は容易に聞き取れる。魔族特有の能力によるものだ。

それに対して人間の魔王は大声で応答する。

「外に出て、気付いたことがあります」

「言ってみろ!」

「この吹雪……自然現象ではないかもしれません」

「どういうことだ!」

「魔素―マナーが一定の方向へ集められているようです。それもこの辺りだけではなく、国中の魔素が」

魔素とは、空气中に漂う基本的に不可視のエネルギーの事だ。

生物はこれを体内に取り込むことで魔力を発生させ、魔法を行使することができる。そして、取り込める魔素の量が多ければ多いほど、その生物は魔力が高いということになる。

マオはその魔素を視認できる稀有な能力の持ち主なのだ。

「何者かが魔法でこれを起こしてるって訳か！」

「はい。どうなさいますか？」

この外出の本来の目的は、各家庭に訪問し備蓄の状況を確認すること。しかし、この吹雪の原因がわかったのであれば、真っ先にそれを解決したいというのがラッディの本音だ。

——だが、何よりもまずは国民の安全を確認しなければならない！
「国民の安全確認は、雪男——イエティ——たちにやらせてみてはどうでしょうか？」

「うーん。イエティ達は休暇中なんだが……」

自身の心中を察したマオの提案に、ラッディは渋った様子で答える。

現在この国は多事多難だが、ラッディは部下達に定期的に連日休暇を取らせている。

この環境を改善するには長い期間を要するため、その半ばで体調を崩さぬように、という配慮だ。

この時期に労働と休暇の調和を崩すことは、体調を崩す原因になりかねない。

「有事ですから仕方ありませんよ。きっと、彼らも納得するでしょう」

「いや、でも——」

「オホホホ！ 話は聞かせてもらいましたぞ！」

鳴き声が響きわたり、雪の中から毛むくじやらが飛び出してくる。全身が白い毛で覆われているイエティ。彼らのリーダーを務める一匹で、体格はラッディより二回りほど大きい。

「盗み聞きですか。感心しませんね」

「オホホ、それは違いますぞ、マオ様。ワタクシ、偶然ここを通りかかっただけなのです」

突然の登場に驚ろかされた様子のマオは、不機嫌そうにイエティを睨み付ける。しかし、イエティはそれをもろともせず、自慢のドジウ髭に触れながら弁解する。

「我々、ちょうど仕事がしたいと思っていたところなのですぞ！」
二足で立っていたイエティが両手を雪の上に付き、一息付く。これは咆哮を上げる前触れで、それを確認したラッディとマオが両耳を塞ぐと、大きな唸り声が大気を震わせる。

その衝撃にマオが小さく震えたのを、ラッディは見逃さなかった。
「相変わらずお前の咆哮はよく響くな」
「お褒めにお預かり光栄でありますぞ」

こんなやり取りをしていると、遠くから複数の咆哮が帰ってくる。それは何度も繰り返されながら、次第に接近してくる。

「あと三分もあれば全員揃うでしょう。ささ、あとは我らにお任せあれ、魔王様」

「悪いな。あいつらにも宜しく言っておいてくれ」
二人はイエティと別れ、歩みを進める。

*

「いきなり雪の中から飛び出してくるのは勘弁してほしいです……」
「確かにあれは肝が冷えるな。魔素がどこに集められているかわかるか？」

「はい。先導します」

ラッディを壁にして、吹雪を軽減していたマオが前に出る。

吹き飛ばされないか心配だが、それを口に出すとマオがヘソを曲げてしまうので、ラッディはさりげなく彼女の肩に手を置いた。

「はぐれないで下さいよ。搜索魔法が機能するか判りませんので」
ラッディもマオも、魔法によって吹雪を起こす事は造作もない。
しかし、国規模のものとなれば別だ。

二人以上の地方魔王が大魔王の力ならば見込みはあるが、ラッディ一人の魔力では不可能だと言い切れる。

地方魔王一人では、この国の三十パーセント以下の範囲の気候を三十分程度操作するのが精一杯だ。

ならば、この吹雪を起こしているのは何者なのだろうか。
ラッディは一つの答えに行きついた。
――精霊の仕業だ。

北風と魔王 1 (後書き)

ハジメマシテ 多々良ゆゑむです。

これ、処女作です。なるべく読みやすさを重視して書いたつもりですが、至らぬ点があれば遠慮なく指摘してくださいな。

北風と魔王 2

精霊——人間と魔族を凌駕する大きな魔力を持ち、自然の摂理を司る存在。

十数年前に姿を現したそれらの大半が自由奔放な性質を持ち、しばしば人間達に迷惑をかけていた。

高位の精霊ほどその傾向は強くなるというのが、非常に質が悪い。しかし、悪い事ばかりではない。

精霊が出現したことにより、長きに渡って対立していた人間と魔族が手を取り合うことができた。

魔王軍に吸収される、という形は本意ではあったものの、その点に関してのみラッディは精霊に感謝していた。

「マオ、今どこを歩いている！」

二人は、依然として天地の区別がつかない文字通り白銀の世界を歩いていた。マオが持つ魔素——マナーを見る能力のみを頼って。

そうせざるを得なかったのは、外套を羽織っても、マフラーを巻いても、手袋を付けても防ぎきれない身を裂くような寒さで二人の五感はあるてないようなものだったからだ。

ラッディは今、猛吹雪の中で唯一視認できる存在であるマオに先導され、吹雪の発生地点に向かっていた。

「わかりません。魔素の流れを辿っているだけですから」

「もう少し、俺を安心させてほしい！」

「でも貴方はそれを望んでいないですよ？ 貴方は常に脚色のない真実を求めてきましたし」

——確かに、そうだけど。

「ですが、せつかくなので正確な情報で安心させて差しあげます。私たちは一寸の狂いもなく目的地へ向かっていますよ」

目的地というのは、この吹雪を起こしている精霊の居場所だ。マオいわく魔素の流れは出発時から目立った変化はないらしい。それを鑑みて、術者の有り様も同様であるとラッディは考えた。

マオが振り向いた。

「着きました、ここが吹雪の中心のようです」

吹雪が収まった。正確にはそうではないのだが、ラッディはそう思った。

正確には、吹雪が収まったのではなく、湖の周囲だけ吹雪いていないのだ。振り返れば白い壁と見違えそうな激しいブリザード。なのにここは限りなく無風に近い。

まるで白いドームに閉じ込められたような気がする。

そして、一面白銀の世界にも変化が現れた。

二人の目前に海と見紛う程大きな湖が広がっているのだ。そして、当然それには氷が張っていた。

「精霊は湖の上に居るようですね、行きましょう」

「この上に行くのか……」

「注意してくださいよ」

差し出されたマオの手を取り、ラッディは湖の中心へ向かうべく恐る恐る氷に足を――

「ふぎゃ」

この声は、氷で足を滑らせたラッディの道連れにされたマオのものだ。

氷に尻餅を付いて悶えている上司を睨みつける。

マオ自身はラッディの一步後ろに居たので、柔らかい雪のお陰で痛い思いをすることはなかったのだが、第一步で滑るのは良くない

し、何度か足を滑らせながらやっと立ち上がったのは、とても魔王の振る舞いには見えず、酷く惨めで滑稽だった。

「ぶざ——」

「言つな、今は忘れる。幸いここは吹雪が収まっているし、魔素も満ち溢れている。ここから先は飛んで行くぞ」

二人を中心にして風が渦を巻いた。それは冷たいということは共通しているが、吹雪とは違い二人の体を優しく包み込んで、浮かび上がらせた。

本来は強風を叩きつけるのが風魔法の主な用途だが、ある程度熟練した使い手は絶妙な力加減でモノを浮かべることができる。

「もう少し強いほうが、いいんじゃないですか」

マオが新たに風を起こし、勢いを上乘せする。勢いが増した風はびゅうびゅうと唸りをげ、雪を巻き上げていく。そして、視界は再び一面白銀に。

「おい、どうすんだこれ」

「魔素の流れを見れば、視界が悪くても問題ありません。後は私に任せて、魔王様は魔力を温存しておいてください」

魔素はそこら中に満ち溢れている。しかし、魔法の行使と魔素の取り込みの両立はとても難しい——鼻で空気を吸いながら口から息を吐く事くらい——。

相手は精霊という未知の存在、魔力はできるだけ多く蓄えた状態で挑みたい、とマオは考えたのだらう。

確かに、一国を覆い尽くす吹雪を行使する相手との戦いの中で、魔素を取り込む隙はそうそう無いだらう。

ラッディはマオの言うとおり、身体を風に預けて休む事にした。「行きますっ」

珍しい事にマオが声を張り上げると、背後で何かが爆ぜる音がした。

それによって発生した暴風によって、二人は湖の中心へ向かって爆発的な推進を始めた。

それが圧縮した空気を爆発させた事によるものだと言ッディが理解したのは、そのすぐ後の事である。

「これで休める訳ねえだろうがああああ！」

臓物が浮くような感覚と共に、吐き気に襲われた。しかし、嘔吐しようとしても空気が口に入って息をし辛くなり、状況は悪化するばかり。

一方、マオは空気を切り裂いて飛ぶ爽快感を存分に堪能していた。風は天国と地獄を乗せて北へ吹く。

*

十五分程立った頃、言ッディは何とか体調を持ち直し、飛行魔法を使用するマオの、忙しくなびく淡い紫の髪と外套をぼうつと見ていた。

「間もなく到着します。急停止に備えてください」

——えっ？

「ご——よん——さん——にい——いち」

「ちよっ、待つ」

風が霧散して身を投げ出される。それに備える間が無かった言ッディは、氷にステッキを突き刺して急停止したマオの脇を通り過ぎ、氷の上を滑って行く。

——おい、それ何処から出した！

言ッディはそれがとてもスローに見えた。そのせいか、目の前に一人の少女が居ること、そして驚いた表情でこちらを見ていることに気付くことができた。

艶のある水色の髪、幼さの残る丸みがある目、白を基調とし青系統の模様やレースで装飾されたドレスを身に着けていて、頭には、言ッディとマオの中間くらいの外見年齢の少女には不釣り合いなデИАラ。

二本のオリーブの枝を模したそれには宝石がふんだんに実り、まるで霜が降りているようだった。

彼女は突然の出来事で、こちらを見る以外の反応ができないようだ。

風の速さで滑るラッディも、少女を観察する以上の反応を起こす事ができるはずもなく、激突した。

ラッディは少女に覆いかぶさるように倒れ、それでも勢いが収まることは無く、魔王と少女は滑って行った。マオを残して。

「置いて行かれちゃいました」

*

「な、何なのよ、アンタ！」

ラッディの下敷きにされている少女が甲高い声を上げた。

「悪い。俺はラッディ、この国で魔王やって……うつ」

突然押し倒した無礼を詫びなければならない、と思ったラッディは自己紹介を始めたが、それを契機にしたかのように、一気にこみあげてくる。

どうしてか今日の朝食が頭をよぎった。

ラッディは未だに胃の中に残っていたそれらを、目の前の少女にぶちまけた。朝食を思い出したのは、その予兆か何かだったのだろう。

彼女の綺麗な髪が何だか黄色っぽい吐瀉物に汚された。

「いやあああああああ！」

酸っぱい匂いはミカンのものかと最初は思ったが、胃酸の匂いだと分かった。

今朝食べたスパゲッティが、悲鳴を上げる少女の髪に絡まっていた。

「最低！ 最低！ 最低！」

ラッデイの下で少女が暴れると、ラッデイの体が浮かび上がった。風が未だに勢い衰えず滑る少女を中心にとぐるを巻いていた。ラッデイはそれに煽られて浮かび上がったのだ。

受け身を取って衝撃を氷に逃がして、少女を見ると、取り巻く風が天へ向かって伸びていく。

それにしたがって威力を増し、一カ所に止まった風の中の氷が挟まれ、大小鋭鈍様々な大きさ形の氷が巻き上がり、少女の姿を隠す。

ラッデイが風から体を庇っていると、風が唐突に爆発した。

爆風で氷が四方に放たれ、辺りを覆っていた雲海から顔を覗かせた太陽を鬱陶しげに見上げる少女に気付く間さえ与えず、ラッデイに襲いかかる。

腕では庇いきれないと素早く判断すると、ラッデイは天に手を掲げた。

「現在は地より高遠にあり、夜の主と対を成す？原初の混沌の片割れ？よ。仇なすモノを穿て！」

顔を見せていた太陽から、光の筋がラッデイと少女の間に落ちる。ラッデイに襲いかかった氷が瞬く間に気化し、それだけではとどまらず、氷が張った湖に大きな穴を穿がった。

——ソーラーレイ

一定範囲内の太陽光を収束させ、熱で対象を焼く。一時的ではあるが光の軌道を捻じ曲げるそれは、ラッデイの知る光魔法の中で最上級のものだった。

ラッデイは炎魔法が得意であつたのだが、この風の中では上手く使えないと判断して、光属性を行使した。

穴を挟んで向こう側に立つ少女は、鬱陶しげに太陽を見上っていた視線をラッデイに落とす。

「アンタ、私を誰だと思ってるの？」

太陽を見上げた時と同様の、否、それ以上の怨嗟が込められていた。

ラッディはこの少女とついさっき出会ったばかりなので、そんなことを言われてもどうしようもなかった。

「知らないなら教えてあげる。——第二級自然精霊並びに十七代目？北風？」

北風の少女は得意げに自分の肩書きを挙げた後、暫く間を置いてからやはり得意げに名乗りを上げた。

「メアリー・ムラヴィヨヴァ＝アポストルよ！」

酸っぱいゲロの匂いを放つ少女のティアラは、日光を受けて神秘的な輝きを放っていた。

北風と魔王 3 - 1

氷が張った湖の上。

正対する北国の魔王と北風の少女の間には穴が穿たれ、そこから覗く水面は、雲間から見える太陽を映し出し、静かな輝きを放っている。

一陣の風が吹き、水面が騒々しく揺れる（波打つ）。少し寒くなつたな、と北国の魔王ラッディはマフラーを締め直した。

先手を打ったのはメアリーと名乗った北風の少女の方だった。補佐官が居ればこの些細に見える一手を見逃すことは無かつただろうが、既に周囲に漂っていた魔素のほとんどが間に彼女に吸い込まれている。

魔素が満ちた少女がすることは一つ。それは、魔王から抵抗手段を奪う事だった。

メアリーの意志に従うかのように、日光が漏れ出す隙間を埋めていこうと雲が流れだす。

それに気づいたラッディは、咄嗟に太陽に手をかざした。

「？昼の主？の軍勢よ、ここに降り立ち我と共に在れ！」

太陽から一筋の光がラッディに降り注ぎ、それは真上で分裂して球の形を成し、彼の前・後・左・右で停止した。

——コーリンググレイ

光のエネルギーを四つに分けて収集することで、様々なパターンの攻撃・防御へと柔軟に派生させることができる。

「ふーん。たったそれだけで良いんだ？」

メアリー右手が横なぎに振るわれると、その空間から風が生じる。徐々に勢いを増しながら推進する風のうねりは、水面を通過する

際に巻き上げた水を凍てつかせ、吹雪となってラッディに押し寄せる。

「俺は少数精鋭つてのにロマンを感じるんだよ」

魔王が前方の光に手をかざすと、輝きを増して風船のように膨張し始めた。

膨張しきった風船の縛り口を解いたかのように、光の球から光の奔流が放たれる。

「邪魔だ、消えろ！」

お互いに負けずとも劣らない力がぶつかり合う。しかし、拮抗は一瞬。そして、拮抗に見えたそれは、光の奔流が吹雪を飲み込む様でしかなかった。

魔素が枯渴した今、ラッディが勝利するには少ないエネルギーを早急に有効かつ攻撃性の高いものに転化しなければならない。

しかし、魔素の枯渴に気付いていないラッディはそれを理解していなかった。

魔王が両手を広げると、その先にある二つの光が矢の形を成す。

「——麗しき日輪を解く無粋なるモノに？ 甲矢」と？ 乙矢？ の洗礼を」

左手の矢が放たれ、それを追うように右手の矢が走りだした。

既に勝利を確信していた彼にとって、これはさほど重要ではないダメ押しの攻撃であった。

しかし、光に飲まれたはずの吹雪は魔王の体を引き裂いた。

「なっ…… あ！」

光の奔流が過ぎ去った後、そこに張っていた氷は全て溶けてなくなっていたはずなのだが、少女の足元には氷が残っていた。

「アンタさあ……氷は熱に弱いとか思っちゃってるわけ？ あはは、そりゃないよ」

「な、なんで……なんで生きてんだよ」

メアリーを見据える魔王が纏う外套は無残にも引き裂かれ、所々が赤黒く染まっている。

奇跡的にもほぼ無傷だった補佐官御手製のマフラーは、ラッディが両腕を前で交差させて防御を試みたことを意味していた。

「まあ確かに氷は溶けちゃうけど、固め直せば問題ないでしょ？

私たちはアンタ達とは格が違うのよ。主に魔法体系が」

確かに、ここは湖だから氷を生成するための水なんてそこら中にあるし、そうでなくても空気に含まれている。

「クソがッ！」

何かに反応したラッディが怨嗟の声を上げながら身を翻す。

突然現れたつららが風によって回転力を得て、身体を貫こうとしていた。

なんとか突き刺さる寸前に拳で叩き落とすと、鈍い痛みが脳に伝わりと共に、腕から血が滴り落ちた。

これまでの少女の発現を鑑みると、溶けた氷を瞬く間に元通りにするのも、空気中の水分を用いて離れた場所に氷を発現させるのも、精霊の手にかかれれば朝飯前なのだろう。

しかし、これは少女が無傷で魔王の攻撃を凌いだ事の説明にはならない。

「いい反応してるじゃん、人間の癖に魔王やってるだけの事はあるわね。でも……そっちはダミーよ」

背後でザパア！ という音がすると、魔王の背中に冷たい痛みが

走った。

背中を濡らされたラッディが振り返ると、水で構成された文字通りの水龍が、魔王を睨みつけていた。

そいつは魔王が持つ残り一つの光を照り返しているせいで、鱗のような輝きを持っていた。

「氷と風に気を取られ過ぎよ、ボウヤ」

妙に大人びた調子で挑発するこの少女は北風の精霊——司るのは氷と風。

しかし、精霊だって人間や魔族と変わらない？魔法使い？だ。己が司る属性以外も行使できて不思議ではない。

——なぜそこまで頭が回らなかったんだ、俺は。少女の外見に油断した？

——そんな馬鹿な。仮にそうだとしても、今はこの状況を越えるのが第一だろ。

——飛んで逃げるか、いや、この水の量だと逃げ切れん。術者を攻撃すれば水龍は何とかなるか？

——しかし、光が通じない相手をどう攻撃する？

思考の閉幕を待つことは無く、水龍の大口が哮りを上げて魔王に襲い掛かった。

北風と魔王 3 - 3

水龍は、ラッディが思考の閉幕を待つことは無く、大口を開けて哮りを上げると、魔王に襲い掛かった。

「この上なく艶やかに、麗しくこの一瞬——最期を輝き誇れ！」
光の球が瞬いて、ラッディの全身全霊が込められた輝きが辺り全てを覆い込む。

例外として、光源に背を向けていたラッディと閃光に目を焼かれたメアリーの足下から伸びる影があった。

「——っ！ 時間稼ぎのつもり！？ こんな事したってどうせアンタは——」

「ああ、そうだな……だが、こっちはダミーだ」

魔王が決断したのは、水龍の哮りと同時の事だった。

北風の少女は、目的を見抜くことはできたが、そのための手段についての推測を半ばで放棄してしまっていた。

水龍の動きが止まっているから、それどころではなかったのかもしれないが。

「本命はこっちだ——『ドッペル』」

ラッディの時間稼ぎは、これだけでは終わらない。

メアリーの足下の影が震えた。

風に吹かれた木の葉のようにゆらゆらと揺れる影に蠢く？それ”

は、少女の健康的な脚に手を伸ばした。

「ひゃうっ……！ な、なによこれっ」

ラッディは這う影を通じて滑らかな感触を愉しんだりはできない。

水龍に阻まれて少女の姿が見えないので、それを見て楽しむ事もできないし、しようとも思っていない。

ただ純粹に、敵の動きを封じようとしているだけだ。

* * *

「んっ……、ふひゃあっ！」

未知の存在が脚に絡まり、這い上がっていく。

視界が塞がれて他の知覚が敏感になっっているためか、未曾有の感触に対してメアリーは、眉を顰めて不快感を露わにしながら抵抗を試みた。

しかし、寸刻過ぎた頃、少女は時折、艶めかしく身体をくねらせたり、唇を震わせて嬌声を発するなどの反応を示すようになった。メアリーにとってかつてない存在は、少女を傷をつける事なく、未知の感触を残して機械的に上を目指していく。

それが背中に達した頃、未曾有の存在への恐怖もある程度収まってきた。

しかし、身体を這うくすぐったさには成すがままであった。メアリーの動きは完全に封じられた。

* * *

マオに教わった呪文《doppel》

——発音が重要らしいが、上手くできただろうか。

影の分身を呼び出し、使役する。

闇魔法に馴染みのなかったラッディが最近、マオに教わった初級

魔法だ。

静止したままの水龍を見てラッディは成功を確信した。

水龍とメアリーの動きを封じる事に成功したものの、この状況を好転させる手段がラッディには無い。

しかし、これだけ時間を稼げれば彼女がここまで駆けつけるには十分だ。

一人ではあの二級精霊に及ばなかったが、二人なら、マオとなら何とかなるだろう。

——そう思った刹那。

水龍の開かれたままの大口に先が尖った棒状の鉄が、どこからか投げ入れられた。

「やつと来たか」

飲み下されていく棒状の鉄——ステッキに彫り込まれた文字に仄かに光が宿る。

窪みから光が零れ、水の中を文字がひらひらと舞う。そして文字たちは陣を成し、意味を成す。

——人对魔物の構図が変わる前。

闇に隠れ、隠密に人を狩るべく魔族が用いていた音を発さずに魔法を発動する技術——無言詠唱。

人と魔物が手を組んだ今も、それは魔族たちの文化に根強く残っていた。

《B o l t f r o m t h e A b y s s》

文字が一際閃いた後、水龍の中に気泡が生じて、そのせいで形が少し歪になった。

湧き続ける気泡で水龍は歪み、膨らみ、砂山のように呆気なく崩

れた。

「なっ……」

遮蔽物が消えてすぐ、空色の髪を肩にかかる程度に伸ばしている北風の少女——メアリーが、

啞然とした様子で僅かにウェーブのかかった淡い紫色の髪を背中まで伸ばした三白眼の少女——マオを見ているのが分かった。

前者は潤んだ碧、後者は深い赤の瞳でお互いを視認する。

「魔王様、あれは何ですか」

抑制の利いた口調でマオが尋ねる。

「精霊に決まってるんだろ」

「そうじゃなくて、あの精霊に巻きついてる？あれ？です」

メアリーを指さす。

上気した頬をほんのり赤く染め、瞳を潤ませている少女に黒い布切れのようなものが巻きついていていた。

「ドッペルだよ。前にお前が教えてくれた奴」

「あれが……」

ムツとした表情でマオは、長身の魔王を見上げた。

「ドッペルは禁止。これから何があっても使わないように」

「ええっ！いきなりどうしたんだよ」

「まあ今回は良い方向に転びそうなので、見逃してあげますよ——ド変態」

「……訳がわからん。とりあえず、アイツのとこ行ってくる」

「くれぐれも気をつけてください。まだ力を残しているかもしれないかもしれませんから」

ラッディは風を纏い、浮上した。

*

水面を渡り、少女のもとにたどり着く。

ラッディはメアリー達精霊に対して抱いていた疑問をぶつけた。

「おい、どうしてお前たちはこんな——」

「ド変態」

同じ日に二回もド変態呼ばわりされるとは、思いもしなかった。

ラッディは危うく言葉を失うところであったが、何とか二の句を継いだ。

「ゲロ吐きかけたのは謝る。とりあえず、なんでこんな事をしたのか話してくれ」

「何よその態度！ 人の事、散々弄んでおいて！」

影の存在に縛られながらも、メアリーは反抗的な眼差しを以ってして食って掛かった。

しかし、今のところは水龍を再構成する様子もなく、吹雪も徐々に減衰しているように感じられる。

原因は不明だが、この精霊は今、魔法が行使できない状態にあるようだ。

このチャンスを生かせば優位に立てるかもしれない。

「自分の立場を理解していないようだな」

「ひうつ……」

拘束を強めると少女の口から、嗚咽が漏れた。

年端もいかぬ柔肌に痕が残る可能性があったが、そこまで取り計らういわれはない。

この娘は人間と魔族の——世界の敵なのだ。

それに、もしかすると幼稚なのは外見や中身だけで、実際は老婆の如く年を喰らっているのかもしれない。

「もう一度訊く、なぜこんな事をした」

暫くの逡巡。これが最後であることを察したメアリーは観念した様子で答えた。

「……春が来ないようにするため」

「なぜそんなことをする」

ラッディは淡々とした具合で質問を続ける。

「春が来たら……色々不都合なのよ」

「理由はそれだけか」

がくり、と頂垂れた。

ラッディはそれを肯定と受け取ると、掌に業火を生じさせた。

魔王軍に入って間もない頃、魔族の魔法体系を見様見真似で解釈し、組み込むことで生まれた独自の魔法体系。

人と魔、両方の魔法体系の良い所のみを生かしたそれは、炎以外の属性に転用することは出来なかつたが、その力はラッディを当時の魔王たちに人目置かれる存在にたらしめた。

精霊への憤りが具現化したような、破壊的なエネルギーが放たれようとした時、少女は叫んだ。

「春が来たら私は殺されるのよ!!」

「あ?」

思わず手を止めて聞き返してしまう。その直後に己の失態を悔いた。

これが畏だとしたら、大きな隙を与えてしまったことになる。

だが、メアリーはラッディの様子を伺うと、魔法を行使する素振りを見せずに続けた。

「先代も、先々代も……みんな春が来るたびに殺された。そのせいでまだ二級精霊の私が今年の北風を務める羽目になって……」

精霊を殺し慣れた存在がどのようなモノかはわからないが、一刻も早くこの国に春を運ぶのが北の国の魔王——ラッディの役目だ。

——この国の為になるのなら、この精霊を生かしておいても良いかもしれない。

多くのリスクをもたらすが、この冬を手っ取り早く終わらせる方法が頭を過った。

あわよくば、精霊について多くの事を知ることができるかもしれない。

「今年いっぱいお前を守ってやれば、もうこんな事しないんだな？」
「えっ……？」

茫然としている北風に、魔王は手を差し伸べる。

「え、ええ。そうだけど——この影をどうにかしてくれなきゃ動けないわ」

「あ、悪い」

影の存在がメアリーから離れ、足下の影に沈んでいく。
自由の身になった少女は軽く伸びをした後、魔王に訊ねた。

「本当にいいの？ 私を庇ったせいでアンタも……この国の人も皆殺されるかもしれないわよ？」

「この国のモノは全て守り抜く。それが俺の理想だ」

魔王は改めて手を伸ばす。

「青い理想ね」

「ガキが知ったような口利いてんじゃねえ」

北風はこの世界で初めての笑顔で、心からそれに応じた。

メアリーを連れて帰宅した後、マオ達は中央国に提出する報告書の作成に取り掛かっていた。

ラッディは字が雑なのでこういったものはマオの仕事である。

「……妥当な取引とはとても思えません。何故このようなことを私への相談なしに決定するのですか」

報告書に視線を落としていたマオはため息をついた後、向かい側の若き魔王を一瞥した。

あの精霊を生け捕りにしたのは予想の範疇だったが、保護すると言いついたのには度肝を抜かれた。

利益に目がくらみ危険性を落としがちなのは今に始まったことではない。

それを承知の上で次期魔王として推したのだから、彼の尻拭いをする責任が自分にはある。

「それで、どうなんだ。良いのか？」

「保留です。この件は我が国で処理して良いものではないでしょう。報告書を提出し、中央国議会の判断を仰ぐべきです」

「少なくとも答えが出るまでは匿ってやれるんだな？」

「まあ……そうですね」

なんだか捨て犬を拾って帰ってきた子供と母親の会話のようだ。

本当にあの北風を上回る力を持つ先代の精霊を十以上殺したというのなら、

それは単体で魔王を凌ぐ力を持つ怪物の仕業であろうことを理解

しているのだろうか。

「——勝てるんですか、一級精霊に」

「……今度は全てを守り抜く」

ラッディがわずかに頬を強ばらせながら言葉を絞り出す。

語調は心もとなく、体裁を取り繕うという見え透いた意図による発言はそれに反していた。

回答に期待していた訳ではないので、これ以上傷口を抉るようなことはしない。

あの戦は当事者の心に深い傷を残していった。

しかし、それは乗り越えるのではなく背負わなければならない、とマオは考えている。

——痛みを忘れた統治者は暴君と化す。

彼にはそうなって欲しくない。

「……そろそろお休みになることをお勧めします」

「まだ報告書ができてないだろ」

「七割は私たちが帰ってくる前にイエティがやってくれていました。残りは魔王様から聞いた精霊の話をまとめるのみです」

力強い体躯を持つあのドジョウ髭のイエティは、器用な一面も持ち合わせていた。

戦闘が無い日——ほとんどがそうなのだが——は自主的に雑務にあたってくれているし、

ここだけの話、編み物を始めたのはドジョウ髭に影響されてのことだ。

「ふあ…… ああ、そうさせてもらっ」

欠伸をしながら返事をする、ラッディはコタツから離れて自室へ向かって歩いて行った。

——まったく……意識を保ってるので精一杯の癖に。
「おやすみなさい、魔王様」

…ッ……！……ッディ！

「——氣を確かに持つてください！」

不意に現実に取り戻された。

停止していた思考回路が再起動し、周囲の状況を飲み込もうとしている。

そんな風に漠然と自己観察をしているうちに思考回路が監察結果を示した。

ここは中央国。その名の通り東西南北の四国の中心に在り、それらを統率する大魔王の御座す地である。

東西南北の物品や人々が行き来するため大層にぎやかなのだが、今はそうではない。

現在ここは、対？夜の支配者？の最終防衛線——少し前にここ以外の防衛線の全てが陥落したという報告が届いたのだ。

油断していたわけではないのは下っ端である自分でもわかる。

相手は一級精霊、万全を期して——それが裏目に出たのだ。

始めは単体だった敵は進むごとに生を蝕み、それを糧に死を肥大させていった。

それは既に自分たちの手に負える規模ではない。それどころか東西南北、四人の魔王でさえも——

肥大した死の臭いが鼻腔に突き刺さった。

それに反応した今まで黙り込んでいた者達が口々に喚き始める。

「来たぞ……」「魔王様たちは何をしているんだ」「向こうはどうなったんだ……」

彼らの視線の先で、死の軍勢を率いる？月？が・淫猥な笑み・を

浮かべていた。

「……」

ろくに眠れなかったのと、嫌な夢を見せられたせいで目覚めの悪さが二乗になってしまっている。

寝なおして今度はマシな夢を見ようと試みても、変に疲れが取れてしまった身体はそれを許してはくれない。

変なのはそれだけではない。

記憶が正しければ自分はメアリーとの戦いで全身に傷を負っていた。

床に就いてからも痛みはあつたし、なかなか寝付けなかったのはそのせいだ。

しかし——全ての傷が塞がっていた。

体を動かすのは辛い、それはラッディが朝に弱いせいなので完治していると言っていていいだろう。

あの夢を見るまでもなく判っていたことだが、一級精霊との戦いは一国規模では収まらない。

西も、東も、南も——中央国さえも巻き込むことになる。

それでも全てを守り抜く、ラッディはその心に未だ実を付ける事のない理想を茂らせていた。

「おはようございます、魔王様」

「おはよう」

居間で朝食をとっていたマオと挨拶を交わしてコタツに入る。

今日の朝食は見るからにふわふわなオムレットとハムにサラダ、あとロールパンとコンソメスープのようだ。

「おはよ
」

台所から挨拶の声が聞こえてきた。

「アンタ、トマト嫌いなんだってね。オムレツの中身はチーズでいい？」

水色の髪の少女が穏やかな笑みを浮かべて立っていた。

「はい、どうぞ。残したら承知しないから」

ラッディの分の朝食をメアリーが運んできた。

今彼女が身に着けているのはドレスではない。

ワンピースの上に葉っぱ柄の厚手の上着を羽織っている——マオの私服を借りたらしくサイズが小さい——。

あのドレスと比べれば地味感は否めないが、今の方が似合っているように思えた。

「なあ、お前って治療魔法使えたっけ」

コンソメスープを飲んでいるマオに尋ねる。

魔法使いは攻撃型と支援型で大きく二分される。

そこからも得意分野や支援形態でさらに細かく分けられるのだが、この国に支援型は数人しか所属しておらずその中に医療魔法の使い手は一人しかいない。その上現在出張中である。

この国は精霊の出現率が極端に低いため最低限の戦力と資金しか用意されていないのだ。

支援型の魔法使いなら昨日負った傷を一晩で完治させることもできなくはない。

しかし今ここにいる三人は攻撃型の魔法使いである。

マオはラッディの問いに返事をせず黙々と食べている。そんなに美味しいのか。

仕方ない、ならば——

「なあ、精霊って——」

「食事中に許されるのは食べ物話題だけ！」

その質問は言い終える前に台所からの声に一蹴された。

マオが返答しなかったのは、同じようなことを言われていたからなのだろう。

質問は食事を終えてからにしよう、とラッディはオムレツを口の中に放り込む。それと同じくしてマオがオムレツを口にした。砂糖が入った卵の甘みを細かく刻まれたトマトの酸味が――

――トマト？

今の自分はさぞ蒼白な顔色をしているのだろうと、同じ色の表情を浮かべるマオを見て思う。

理性と本能を超越した何かが全身に命令を送る。

それは拒絶反応。真っ先に喉が受け入れの拒否を表明し、次いで消化器官たちが吐き出す事を要求する。

一方、コタツを挟んで向かい側のマオは全身を怖気立たせ震わせている。

すぐるようにラッディを見る三白眼の焦点は定まらず、ぐるぐる回っていた。チーズが入っていたのだろう。

双方とも卵は好物だったのだが、

好きなものを先に食べるか後に残すかの違いが皮肉にも同時にオムレツを口にするというシチュエーションを生み出したのだ。

見るからに辛そうに飲み下すと、ビクンツと大きく身体を跳ねさせた後、コタツに突っ伏して力尽きた。

チーズを要求したはずなのになぜトマトが入っていたのか。

その発端であるメアリーはというと、

「好き嫌いは良くないわよね」

シンクにもたれ掛って嗜虐的な表情を浮かべていた。

マオと同じ轍は踏まない。ラッディはコンソメスープでトマトを無力化して流し込んだ。

「……ふざけたことしやがって」

「精霊つてのは人に迷惑かけないと死ぬのか？ あ？」

食事を終えたラッディは食器を洗っているメアリーに向かって悪態をついた。

「あははっ、ごめんね。でも身体に悪い訳じゃないし、面白かったからいいじゃない」

メアリーが振り向いて両手を合わせ、申し訳なさそうにしている。しかしまったく誠意を感じさせない。

「いや、身体に悪いし死にかけたからな！ 気絶してる奴もいるからな！」

机に突っ伏して微動だにしないマオを指さす。

「好きなものを食べさせてあげるのは良いけど、成長盛りなのに偏った食事させて小っさい大人になったらどーすんの？ 責任取れるの？」

「……確かに」

メアリーの言い分には一理があった。

魔王の補佐を務めているとはいえ、まだ幼い。

嫌がられるかもしれないが、一応の保護者として配慮してやるべきところがあるのかもしれない。

いや――

「俺はこんなにも大きくなっている訳だし大丈夫じゃないのか」

長年食べ物の選り好みをしてきたラッディは、成人男性の平均身長を十分に上回っていた。

ならばこの調子でもマオは健やかな成長を遂げるのではないだろうか。

「アンタ全然わかってない！ 背だけが問題じゃないの。脂っ濃い物ばかり食べてたら肌が脂ぎるし、何より乳製品は女の子には必須

！」

「なぜそこまで必死になるんだ」

「別に……それにしても、攻撃型の魔法使い同士で組むなんてこの国はよっぽど人員が不足してるのね」

——精霊という存在は人に害を与えるが、個人として見てみればそこまで悪い奴ではないのかもしれないな。

「こんな不毛の地に現れる物好きな精霊は滅多に居ないからな」

「物好きで悪かったわね」

洗い物を終えたメアリーはコタツに入ると、幼さの残る碧い瞳を隣に居るラッディに向けた。

「さて、一息ついたところだし聞かせてもらおうか——お前達精霊の目的を」

「……世界の均衡を保つことかしら」

「冬を強引に延長した奴のセリフとは思えないな」

「……確かにずっと冬の方がいいなって気持ちは六割くらいあったわよ？ でも、あれも私たちの仕事の一つだから私利私欲で動いたわけじゃないわ」

「あれが仕事？ 精霊ってのは随分と腕白なんだな」

ラッディの口調には嘲笑の意が含まれていた。

「はあ。誰のせいでこんな状況になってると思ってんの？ そこんとこしっかり自覚して欲しいなあ」

対するメアリーの声には呆れの色が伺えた。

「先に手を出したのはお前らだろ」

「えっ？ アンタらでしょ」

「えっ？」「」

二人はお互いに顔を見合わせた。

「俺たち側の記録には、突然出現した精霊が構想中の人間及び魔族に危害を加えたとなっている」

「そんなのデタラメよ、私たちは仕事中にアンタらに襲われたって聞いているし」

「仕事？ 世界の均衡を保つてやつか」

「そうよ、遊んだりしてる奴らもいるけど、私たちは目的があつて動いてるの」

「精霊の仕事と言えば、あらゆる自然の摂理を司る事だが、メアリーの言っている仕事はそれとは違うような気がした。」

「自然の摂理を司っていてどうして人間や魔族と衝突する事になるんだ。匿ってやるんだから洗いざらい話せよ」

「わかつてるわよ。物事には順序つてのがあるんだから………そんなにがつつかないの」

耳元まで擦り寄ってきたメアリーに囁かれる。

声色が艶のある大人びたそれに変化しているせいか、温かい吐息のせいなのか、思わず顔を反対側に向けた。

なんだかくすぐつたい。

「……別にがつついてねえよ。さつさと話せ」

「あははっ！ やっぱりがつついてるじゃん」

声を元の調子に戻したメアリーはお腹を押さえて笑い転げた。やっぱり精霊は嫌いだ。

「話を続ける」

おでこを指で弾いてやる。

「つう！ ……私らが住んでる世界——？ 精霊界？ って呼んだ方が区別しやすくていいわね。そこから逃げ出した精霊を連れ戻す事よ」
寝転がった体勢のまま、メアリーは話し始めた。

「ここ以外にも世界があるのか」

それなら精霊が突然姿を現したのにも納得がいくかもしれない。

「ええ、この世界は魔素が豊富だから、それ目当てなのか精霊界から脱走する奴が多いのよ」

「こことは異なる世界の存在は信じ難いが……お前たちの世界は魔素が不足してるのか？」

「ええ、魔法の行使に税がかけられる位よ」

「なるほど……そりゃひでえ話だ。こっちに來たくなるのもわかる」
メアリーの言うことが本当ならば、精霊たちは希薄な魔素を豊富な魔力に変換する魔法体系の開発に執心し、それを完成させたのだろう。

それは魔素が豊富なこの世界で真価を發揮し、化け物じみた力を持つ原因になったのかもしれない。

そして、身の丈に合わない力を手にした精霊達は傍若無人に振る舞い、そこらじゅうに迷惑をまき散らしているのである。

「それで……仮に精霊が先に手を出したっていうなら、それは逃げ出した方の精霊たちよ。私ら側は余所の世界の魔素を使って好き放題する事はあまり良しとしていない。——ちよつとした悪戯は別としてね」

「いや、そつちも抑えろよ」

「それは無理、私ら悪戯を生き甲斐にしてるもん」

こいつら、精霊じゃなくて悪魔かそれに近い存在なのではないだろうか。

「それで、話戻すけど——脱走した精霊を捕まえる為に私たちはこの世界に来た。

でも一つ問題が発生したわ。

アイツらの一部が精霊界に伝わる禁術を用いて自然そのものと言つて良い力を手にしたの」

「それならお前たちも持つてるじゃねえか」

一国を巻き込む規模の吹雪を起こす力は、自然そのものと言つて良いかは微妙だが、それに近いものであることは確かだ。

「アンタからすれば私らの力も相当かもしれないけど、自然を司る力つてのは元々あるその管理・調整が許される程度のものなのよ。」

でもアイツらは禁術によつてそれ以上の権限を手にしてしまった」

「並みの精霊では太刀打ちできなくなったと」

「ええ。それだけでなく、その力で存在を自然に溶け込ませているせいで搜索が非常に難しくなっているの。ちなみに？夜の支配者？も禁術を用いた精霊の一人」

「……」

一年と半年ほどさかのぼった時期にあつたあの戦いは、まだ記憶に新しい。

魔王軍の総戦力の半数以上を犠牲にして、やつとこのことで討滅に成功した一級精霊は、

この世界の自然から逸脱した力によつて、死の軍勢を率いていた。あれが精霊に伝わる禁術の力というのか。

「その？夜の支配者？が抑止力になってた精霊が近年、急激に勢力を拡大してるわ。」

私——？北風？個人に課せられた役割はね、その精霊の動きを抑える事なの。こんな大役任されるなんてスゴイでしょ」

メアリーは誇りと諦観が混ざったような、そんな表情をしていた。一級精霊でなければ抑えられない存在を相手にするのが自分より年下の少女とは、精霊界も人員が不足しているのだろうか。

「冬を長引かせることがその精霊を抑える事に繋がるのか」

「ええ、……でも？北風？は私で最後。私が先代たちみたいに殺される前に見つけ出さないと……」

——？夜の支配者？の時と同等か、それ以上の犠牲を出す戦いが始まる。

あの戦いの当事者として、それだけは何としてでも避けなければならない。

この件も中央国に報告しなければならない。

そうして全ての国で力を合わせれば、あれから立ち直った魔王軍なら、今度は犠牲を出さずに精霊に打ち勝つことができるに違いない。

「絶対に見つけ出さず。その精霊に何か特徴はあるのか？」

「……特徴というか、アイツが司ってるものくらいはわかるわ。――

――？太陽”よ」

――太陽、か。

マオが目を覚ましたら、報告書を作ってもらわないといけないな。

あれから数時間後、既に一日の半分以上が過ぎ去り、部屋には傾いた太陽のオレンジの光が射し込んでいる。

「また私を除け者にして話を進めたのですか」

メアリーから聞いた話の内容を伝えてやると、マオは不貞腐れたようにそう言った。

そんなことを言いながらも報告書をしたためてくれたあたり、本当に良く出来た娘だと思う。

「まあまあそんな怒らないで、夕飯はアンタが好きなもん作ってやるからさー！」

メアリーがコタツから出てマオの背後に回ると、ぎゅっと抱きしめた。

「な、なにを企んでいるのですか……！」

この過剰なスキンシップは早く打ち解けるためなのだろうか。

当人は警戒しているが、歳が近めの同性なので——悪戯をしないという条件の上で——すぐに仲良くなれるだろう。

「なにも企んでないわよー。うりうり」

「う、うむう……」

頬を擦り合わせるメアリーに観念したのかマオは小さく呻いた。

よくよく考えてみれば俺は魔王軍に入る前のマオを全く知らない。彼女はどの国で生まれてどのような経緯で魔王軍に所属する事を考えたのだろうか。

昔、同じ隊に所属していた奴が尋ねたことがあったが、上官と部下の関係の所為なのか適当にはぐらかされて終わっていた。

——今なら、教えてくれるかもしれないな。

「前から気になってたんだが、マオはこの出身なんだ？」

「……中央国です」

以外にもあつさり答えは得られた。こいつもしかして上には逆らえないタイプか。

「それで、晩御飯は何がいいかなー？」

「……っ、カレー」

笑いかけるメアリーに対して張りつめた表情で答えた。

「カレーかぁ。確か食材揃ってなかったわよね……」

「誰かさんのせいで冬が長引いたからですよ」

「うっ……」

痛いところを突かれた様子のメアリーの抱擁からマオが抜け出した。

「そろそろ商人たちが戻ってくる頃ですし買い出しに行きましょう」
「ああ、そういえばそんなこと言ってたな」

毎年春は冬から逃れるべく中央国へ遠征した商人が仕入れてきたものを持ち帰ってくるので、そこその規模の市が開かれるらしい。立ち上がって外出の準備をしていると、メアリーが何かに気付いてはっとしてマオを見ていた。

「ちょ、アンタまさか……」

「これに懲りたなら今度からは魔族を甘く見ない事ですね」

見下ろして目を合わせると、マオは口元を緩めた。

どうやら微量の電流を流し込んで気付かないうちに下半身を痺れさせたらしい。見事な手前だ。

「ご、ごめんつてば。だから治して……くううう！」

痺れに悶えながら助けを求めているが、俺たちは？攻撃型？つまり治療は専門外だ。

どうしようもないので、俺とマオだけで買い物に行くか。

これで反省して今朝のような悪戯は止めてくれれば安心できるのだが……。

「もういいわよ！ アンタらが何もしてくれないなら自分でやるから！」

自らの両太股に手をかざしたかと思うと、メアリーが何事もなかったかのように立ち上がった。

「おいお前、治療魔法使えたのかよ」

「言っただしょ、私はアンタらと格が違っつてさ。まあ確かに精霊の中でも攻撃と支援の両方を習得してるのは珍しいけど」

「お前らのところで片方に特化させられるのか」

攻撃型は補助魔法を織り交ぜて戦った方が効率が良く、支援型も最低限の護身術は必要のため、

専門分野を生かす程度に別分野に手を伸ばすことはある。

しかし、両方の分野を実戦級に高めようとすれば余程の才能が無い限りどちらの分野でも活躍できない半端者になってしまう。

そのため、魔法を扱う者は早い段階でどの分野に進むか決断しなければならぬのだ。

「しかし、どうして両方覚えようと思ったんだ？」

「両方こなせるっていう自信があったからに決まってるじゃん」

「うーん……まだ帰ってきていないようです」

落胆した様相のマオが呟いた。

市が開催されるらしき場所まで来たは良いが、商人たちはまだ帰

つてきておらず準備さえ始まっていなかったのだ。

「こつちから迎えに行くか？」

「いえ、そこまでして頂かなくて結構です。今夜くらいは有り合わせで何とかするでしょう」

いつのまにか食事係になったメアリーの方を見ると、少し考える素振りを見せて、

「朝ごはんの事を考えないのなら大丈夫だと思う」

* * *

「ねえねえ白ヤギくん、疲れたりしてなあい？」

馬に跨る僕の背後から穏やかな声がした。

「白ヤギじゃなくてシロギです。さつき休憩したばかりじゃないですか」

僕たち商人は今、北の国に物資を持ち帰るために幌馬車を歩かせていた。

なぜ走らないのかというと、これがこの商団の方針だからで、先頭の僕に続く他の馬車も同様に緩やかな動作で溶け始めた雪を踏みしめている。

「ねえねえ白ヤギくん、お腹すいてなあい？」

肩越しに後ろの様子を伺うと、くるくると巻いた角を生やしたシヨートヘアの女が領収書を持って幌から半身を覗かせていた。

「シロギです！ ……いい加減覚えてください。あと領収書は食べないでくださいよ、商団長」

「ジョーダンだよ。私は羊だから紙は食べられないもんねえ」

柔和な笑みを浮かべるこの女性は、北の国の商団長。

あ、ちなみに僕はヤギでもヒツジでもなく、紙を食べたことなんて一度もない普通の人間です。

「新しい魔王様ってどんな人なんだろうねえ」

退屈を凌ぐべく続けて振られた話題。

入れ違いになる形で出発したので、僕たちは新魔王様とはまだ面識がない。

南魔王様と上官の推薦を受けたと風の便りで耳にしたけれど、どのような御方なのでしょうか。

「うーん……想像できませんが、人間初の魔王なので凄い御方である事は確かですね」

「そうだねえ、魔族を抑えて魔王に選ばれるってとても凄い事だよねえ。それに——ふふっ、早く会ってみたいなあ」

それに——の後は何が続くんですか。

この人のそばに居ると気になることが多すぎて夜も眠れません。

羊の癖に安らかな眠りを妨げるなんて、おかしい話です。

馬が不意に足を止め、白銀がまだらになりつつある平原を拳動不審気味に見回し始めた。

他の馬もそれに倣った動作をしているらしく、商人仲間が困惑の声を上げている。

『お馬さん疲れちゃったんだねえ、休憩しよつかあ』なんて言い出しそうな商団長の姿は幌の中に消えていますし、一体何がどうなっているのでしょうか。

生温い風が耳元を駆け抜けた時、その疑問が解けました。馬たちはこれを感じ取って足を止めたのですね。

馬の視線の先に不穏な気配、一度認識すると芋づる式に他の気配も滲み出るように確認できました。

前方後方、左方、右方——

「落ち着いてください。騎手は中に退避、絶対に降りないように！」

どうやら僕たちは、囲い込まれているようです。

「白ヤギくん！」

幌から姿を現した商団長が、鞆に納められた僕の刀を抱きしめるように持っていた。

名前の訂正は事が済んでからです。

「ありがとうございます。馬車の防衛は任せますよ」

投げ渡されたそれを右手で掴み取ると、僕は馬から飛び降りた。

その瞬間、右後方——死角から火球が襲い掛かるも、不可視の壁に阻まれた。

支援魔法の基礎中の基礎、？障壁？だ。

障壁が解かれるまでおよそ五秒。

四秒——右手は鞆の口よりやや下を握りしめ。

三秒——左手を鞆に添えて左半身を前に。

二秒——見えない標的に大よその見当を付ける。

一秒——腰を落とすと共に左足で踏み込み、障壁の消滅に先駆けて鞆が火花を散らす。

障壁が消滅——既に刀は軌道を描き、標的の断末魔が確かな手ごたえを僕に伝えていた。

「標的は炎と光を司る三級以下の精霊、残存数は四！」

声を張り上げて商団長に状況を報告。こうすればあの人は最善の手で僕を後押ししてくれるのです。

「了解だよ。まずは邪魔な術式を排除するね」

次の標的の居場所を探っていると、不可視の術式が破壊され標的の姿が露わになりました。

それは人にも魔族にも獣にも属せない？魔物？と称すべきもので

した。

四肢を持たない粗末な創りの低級精霊は、全身に炎を纏い宙を漂っていた。

身を左右にくねらせて進む姿は悍ましく、般若のような面も相まって、僕の国に伝わる怪談話に登場する生物を連想させられます。

『白ヤギくん、ぼうつとしないの！ 囲まれてるよ！』
商団長の声が僕の頭に響く。

三つの面の開け広げた口から同時に火球が吐き出される。
上空から一点を狙った攻撃は真横に跳ぶ事で容易に回避できた。
地面に衝突した火球は爆発し、風の後押しを受けて僕は地面を蹴り出す。

おそらくリーダー格は攻撃に参加せず視界の端に居た残りの一体でしょう。

あれは他のとは少し違うような気がするのです。

刀を斜め右下段に構えてリーダー格に向かって跳躍、振り上げて両断——違う、手応えが無い。

何故。——着地した僕は振り向いて、馬車から離れすぎている事に気付く。

商隊を俯瞰していた精霊は散らばり、攻撃を担当する三体は個々に馬車を狙って動き始めた。

残りの一体が僕を見ていた。

そうだ、不可視の術を受けていたのなら敵にも支援魔法使いがいる。

なら幻影を生み出して僕の目を欺く事は造作もない。僕はそんな事さえ判らないのか。

その上障壁の欠点を見事に突かれた。
障壁は平面のものを一枚、薄いものでも二枚展開するのが限界な
のです。

『私は大丈夫、白ヤギくんは一番近い馬車をお願い』

その言葉に頷いて僕は体勢を低く、倒れ込むようにして駆け出す。
精霊の標的は先頭、右端、左端の馬車――

精霊達が体当たりを仕掛けるが、当然そのうちの二体は不可視の
壁に止められた。

残りの一体と馬車の間に入ると、障害である僕を排除しようと火
球が放たれる。

僕は両腕を広げ、その身体で受け止めた。

？魔法の才が皆無？な僕があの人と並ぶにはどうすれば良いか。
それについて考え込んでいた時期があったのですが、結論は至極
単純なもので、目一杯背伸びをするというものでした。

爆発に腹を挟まれ、臓物が焼かれる、気を失いそうになるほど息
苦しい、が――？どうってことありません？。

吹き飛ばされるとでも思っていたのでしょうか、大層驚いた様子
の精霊に僕なりの獰猛な笑みを返してやり、

突っ込んできた顔に拳を叩き込みその勢いを殺す。一欠片の肉片
も僕より後ろに通す気はありません。

拳の皮膚が焼けて煙を上げていますが？どうってことありません
？。

片手で持っていた柄を両手で握って振り上げ、一刀両断。

何ともない僕の身体を風が撫でるように纏わりついて支えてくれ
る。

障壁を突破される残り数秒で二体を仕留めるため、息つく暇もな

く僕は走った。

体が軽い……支援魔法使いはこういった繊細な力加減に優れているのです。

既に真下に迫ろうとする僕に火球が降り注ぐ、が、遅い。

直撃する前に真下を掻い潜って精霊に跳び掛かる。

真横を通り過ぎる際に真横よりやや後ろに構えた得物で、頭から尾まで上下に両断。

「ぐぼおオッ!!」

胸の底から血液がこみ上げて口から零れだす。

反射的に身体を丸めてしまい、バランスを崩して顔面から地面に突っ込む僕を寸での所で風は受け止めてくれた。

無事地面を踏みしめたは良いが、お腹から何か長い物が垂れ下がっている。

まあ？どうってことありません？ので再び飛躍。

今度はこれまで以上に高く、精霊の顔面が確認できない程までに達した。

「——グオオオオオオオ!!」

頂点に達した後、狼の如き咆哮を上げて精霊に向かって降下——しかし僕の記憶はここで途切れています。

痛い。本当は痛くないのでは、と現実逃避をしてしまうほど痛い。そういえば全身の五十%以上に火傷を負うと、ほぼ確実に死亡すると聞いたことがあります。

生きているということは、身体の高十九%以下で収まったということなのでしょう。

記憶が正しければ臓物を派手にばら撒いたはずなのですが、あの人はわざわざ回収してくれたのでしょうか。

そんな事よりも、あの残り一体の精霊はどうなったのでしょうか。

ああ、もう。疑問ばかりが浮かんで落ち着きません。

どうにかして現状を把握したいところですが、久々の柔らかい寝床は温かく僕を包み込んで離そうとしない。

仕方ないのもう一眠り。

「あれれえ？ 白ヤギくん、もう痛くないはずだね？」

「あ、はい」

顔を上げると、商団長が女神のような微笑みを湛えて僕を見ていた。

綺麗に切り揃えられた艶やかな黒のショートヘアは『快活』ではなく、『優美さ』や『奥ゆかしさ』という類の印象を見る物に抱かせる。

そして、羊のそれを思わせる二本の巻角は、彼女の魅力を引き立たせていた。

今の状況を有体に言つと、僕が商団長に覆いかぶさっている。つまり、僕はついさっきまでこの人のおっぱい……いえ、魅惑の双

丘に顔を埋めるという未曾有の幸福を無為に味わっていた訳なのです。

既にあの柔らかさの記憶が僕の脳髓から零れ落ちようとしている。ダメだ、このままではいけない。

「商団長、もう一眠りしてもいいですか」

「だーめ。魔王様に挨拶しなきゃいけないんだよ。もう三日も待ってもらってるんだから」

今ほどこの人の医療魔法の腕を恨めしく思ったことは、今までもこれからもないでしょう。

僕はせめてもの収穫として、商団長の乳房の形状を脳裏に焼き付けて起き上がった。

「あの、残り一体の精霊はどうしたんですか」

「白ヤギくんが気絶した後、逃げていったよ」

「白ヤギではなくシロギです。いい加減にしてください」

あの精霊は支援型だったので、僕に勝てないと判断したのだろう。

「あとね、白ヤギくん。私が居るからって無理しすぎるのは良くないよ？」

「すみません……。でも、僕がやらなきゃ皆無事でここまで来れなかったでしょう。あとシロギです」

商団長の笑みが穏やかなものから、少し困ったようなものに変わった。

「でもね、お馬さんが血を怖がったりするから……」

ああ、成程。もう少し周りのことを考えて欲しい、という事ですね。

「わかりました」

「それじゃあ、そろそろ魔王様の御家に行こっか」

「御挨拶が遅れてしまって申し訳ありません」

いつになく真面目に、しかし笑みを絶やさないう商団長が頭を下げてそう言った。

僕たちは今、新しい魔王様の家に居る。魔王様の家と言っても、外観や内装は民家とさほど変わりはありません。

「構わんさ。……もう動いて大丈夫なのか？」

コタツを挟んで向こう側に居る新しい魔王様と思しき男性が僕に言った。

年は僕と同じくらいでしょうか、眼光は鋭く顔つきは精悍と言えなくもないですが、髪のいたる所が跳ねている。寝癖が何かでしょうか。

「はい。あの、貴方が新しい魔王様ですか」

もしかすると彼の隣にいる水色の髪の女の子が、右側からコタツに入っている紫髪の女の子が魔王ということも有り得るので聞いてみた。

「ああ。ラッディだ、よろしく頼む……お前は？」

「シロギ——シロギ・マルグレーテです。こちらこそ宜しく願います」

「マルグレーテ……あのマルグレーテか？」

魔王様が紫髪の女の子に訝しげな視線を向ける。

それを見た商団長が、それについては私から、と切り出した。

「申し遅れました。」

私は北の国所属の商団『マルグレーテ商団』を取り仕切らせていただいている、

アンナ・マルグレーテといいます。マオとシロギは私の義理の家族でございます」

えっ、つまり、あの女の子は僕の義妹……。

そうそうマルグレーテ一家は、戦争で家族を失った人達の引き取り手として有名なのです。

家族と言っても、ある程度の歳になれば独り立ちするので面識のない人も多いのですけどね。

「言ってますでしたっけ」

紫の髪の子が魔王様に言った。

「聞いてねーよ。ああ、コイツはマオ、俺の補佐官をやっている」

「マオと呼び捨てて下さって結構ですよ。義妹ですし」

じゃあ、僕のことは義兄さんって呼んで下さい、という台詞を僕は飲み込んだ。

「ねえ、私の紹介は？」

水色の髪の子が待ちくたびれたように言うと、魔王様が面倒臭そうな顔をした。

それを見るなり水色の髪少女は、悪戯っ子のような笑みを浮かべた。

「こいつはメアリー……俺の妹だ」

「よろしくっ！ 私のことには好きに呼んでくれていいわよ」

ああ、妹か。言われてみればどことなく纏っている雰囲気似て
いるような……。

どうして俺がメアリーを妹だと偽ったのか。

その訳はアンナとシロギが来る三十分ほど前、

マオの『彼女が精霊である事は、まだ明かさないほうが良いと思います』という発言に遡る事で見出せる。

メアリーの転送魔法で送った報告書について、中央国からの応答がまだなかった。

そこでマオは指示が降りるまで事を公にすべきではない、と考えたのだろう。

当然俺は同意した。しかし、メアリーの介入によって事態はやかいな方向へ転がり始める。

何を思ったのか『じゃあ、私は今からアンタの妹ね』などと言い出したのだ。

俺は『兄妹だと言われて納得する奴なんかいねーよ』と異を唱えた。

しかしそれは、マオの『良いでしょう』という鶴の一声にかき消されてしまった。

「中央国の様子はどうだった？」

「精霊の数が増していました。しかし、今のところ大きな被害は出ていないようです」

俺の質問にマオの義理の家族、アンナが答えた。

中央国は、精霊が頻繁に姿を現すのだが、どうやら十分に対処できているようだ。

「そうか。長旅や市の運営で疲れただろう、今日は帰ってゆっくり

身体を休めるといい」

「ありがとうございます。では、私たちはこれで」

そう言っアアンナとシロギは立ち上がり、玄関へ向かっていった。

「いつまでもニヤニヤしてんじゃねえ、気持ち悪い」

メアリーの頬をつまんで引っ張ってやると、んうっ！？とよくわからない声が上がった。

「中央国はなんとかやっているようですね」

「ああ、もう一年半か……他の魔王はどうしてるだろうか」

俺を北魔王候補として推してくれた南魔王、同期の東、西魔王。

彼らの顔を思い浮かべると、否が応でもあの日の出来事を思い出す……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6181s/>

北風と魔王

2011年7月8日03時19分発行